

ええやんか 生徒と教師の恋

私の真実、私の選択



大今 紀子 著

大今 紀子(おおいま のりこ)

1962年 兵庫県西宮市に生まれる

1982年 大阪府立池田高等学校卒業

現 在 主 婦

現住所 大阪府豊中市春日町 1-11-11

ええやんか 生徒と教師の恋

定価1400円

1987年11月10日 初版印刷

1987年11月20日 初版発行

著 者 大今 紀子©

発行人 鈴木 好晴

印刷人 成島 秀信

発行所 図書出版 にじ書房

東京都文京区本郷 2-30-14 文京第2ビル

電話 03-812-4383 振替 東京 9—181495

印刷・製本 KMS

ISBN4-924776-02-5 C0036

ええやんか 生徒と教師の恋

私の真実、私の選択

大今 紀子 著

にじ書房

まえがき

東横学園中・高校教諭 原田 瑠美子

「やったあ！」

八月二日の朝のこと、新聞をひろげた私は歓声をあげた。「教え子と恋愛の高校教諭、停職処分取り消す」という大きな見出しをみつけたのである。処分取り消しは当然のことと思っていたが、勝利裁決はわが身のことにうれしかった。

私と大今問題との出会いは、二年前のNHKの『おはようジャーナル』という番組がきっかけであった。「高校生は結婚できないの？」という特集で、大今問題が紹介されたが、私はその番組に解説者としてゲスト出演したのが縁で、大阪府人事委員会の審理の証言に立ったのである。

恋愛をすること、結婚すること、子どもを産むことは、他人から強制されたり、禁じられたりするものではない。人間が幸福に生きていくための、最も基本的な人権である。生徒と教師だからといって、この人権が侵されてはならない。それを「非行」扱いにした処分は何としても許せない。そんな怒りの気持ちから、私は証言を引き受けた。

証言の打ち合わせのために、私は大阪へ出かけ、大今さんの家に三度ばかり泊ってもらった。印象的だったのは、「歩さん」「紀子さん」と夫婦間で呼び合うだけでなく、二人の幼い子どもたちにも、「歩ちゃん」「紀ちゃん」と呼ばせていることだった。夫と妻、親と子の関係を、上下・従属関

係としてではなく、対等にとらえていることのあらわれだと、私は好感を持った。

歩さんは、料理が上手だ。ごちそうになったカレーライスはなかなか本格的な味だった。子どもを風呂に入れたり、寝かしつけたりする彼の行動には不自然さがなく、家事も子育ても分担していた。紀子さんは、知的で勉強家。外へ働きに出てはいないが、地域の人と学習会を持ったり政治や社会問題についても関心が深く、視野が広い。弁護士との打ち合わせの資料や、ニュースの原稿を手ぎわよくまとめる彼女をみていて、有能だなあと思った。

こうした二人の、愛情と信頼に支えられた対等な夫婦関係は、紀子さんが在学中の恋愛時代からはぐくんできたものだろう。教育委員会の「処分説明書」にある「妊娠させるに至った」という文言から連想されるような、歩さんが教師の地位を利用して紀子さんに性関係を強要したような関係でなかったことは明白だ。

大今処分にどう反応するかによって、その人の「愛と性」の人權意識がチェックできる、いわば「リトマス試験紙」のようなものだと私は考えている。

進歩的であると自負する人の中にも、「教師が女生徒と性交渉を持つのは問題だ」「なぜ、紀子さんが卒業するまで、待てなかったのか」という声がある。

本書は、こうした批判に対し、確実な反論となっている。ともに生きることを選んだ二人にとって、なにものにも代えがたい恋愛であり、結婚であり、人生そのものであることを読みとってもらえるものと確信している。

ええやんか 生徒と教師の恋——私の真実、私の選択◎目次

まえがき.....原田 瑠美子.....3

序 停職三カ月.....9

●納得いかぬ処分 ●取材攻勢

I 生い立ち.....15

●ガキ大将 ●「女の子」「男の子」 ●中学生活 ●受験

●嫌な自分と訣別 ●教師への失望 ●しょうちゃん

●女の子らしくない? ●満たされぬ心

II アメリカ留学.....33

●出発 ●トウモロコシ畑 ●ハイ・スクール ●自己主張

●チャレンジ ●ステディ ●卒業 ●一万キロの旅

III 復学——受験体制と管理教育.....51

- 無表情 ●キョーセーレンコー ●出会い ●朝鮮語学習会
- マイペース ●白紙答案 ●差別問題研究会 ●日本史ノート
- 聞き書き ●「障害」者問題 ●「光州」を考える
- しょうちゃんとの再会 ●『ええじゃないか』 ●中夜祭企画
- 修正案 ●検閲やめて ●『仰げば悍し』 ●卒業式って何？
- 歌いたくない歌 ●「日の丸」引き降ろし事件

IV 恋愛・妊娠・結婚・出産

- 聞きじょうず ●図書室で ●気楽な人 ●とことん向きあって
- 自問自答 ●婚約 ●メイク・ラブ ●反響 ●結婚
- ラマーズ法 ●赤ちゃん誕生 ●赤ん坊との生活 ●暗転
- 対立 ●配転から、処分へ ●停職処分
- やられたらやり返せ

V “処分”撤回運動

- 不服申し立て ● 生徒の激励 ● 高校生は子供を産めないか
- 落ち込み ● 第一回公開審理 ● 親権が学校に委譲？
- 補佐人の席で ● 私の証言 ● 時期より質 ● 怒り心頭に発す
- マスコミの変化 ● ロゲンカ ● ともに考える
- 人間関係の広がり ● 生活を楽しむ ● 二人でつくる
- 戦史グループ ● 一緒に勉強したい ● 共同子育て

VI ヤッタ、処分取り消し

- 「停職処分を取り消す」 ● 全面勝利 ● 駆けめぐるニュース
- 祝杯 ● 取り消し確定 ● 「妊娠させる」ってどういう意味？
- 「性」はいやらしいこと？ ● 高校生は結婚できないの？
- 妊娠・育児は「束縛」か？

あとがき

序

停職三力月

納得いかぬ、処分

「停職三カ月やってん」

一九八二年十月十五日。私は、夕方になるとむずかる生後三カ月の厚をようやく寝かしつけたところでした。高校の教師をしている夫の歩さん（私たちはお互いに「さん」づけで呼びます）が、帰宅するなり疲れ切った表情で、ポツリとこういいました。

大阪府教育委員会（府教委）から懲戒停職三カ月の処分（懲戒免職につぐ重い処分）をうけ、明日から学校に行けない、という。玄関先でこう聞かされた私には、まったく信じられないことでした。すぐに処分説明書を見た瞬間、私は頭にカーッと体中の血がのぼっていくような気がしました。

「在学中の女生徒と……特別な関係を持ち、同女生徒を妊娠させるに至った。このような行為は、生徒の教育に携わる教育公務員としての社会的信用を著しく失墜するものであり、全体の奉仕者たるにふさわしくない非行である」

「特別な関係」「妊娠させる」——それらの文字から目が離せないまま、心の中でへまちこうてる。おかしい／＼と叫んでいました。

お互いにいろいろな思いをもちながら、暗い気持ちでその日を終えました。けれども翌朝から、

II 序 停職三カ月

地 分 説 明 書

大阪府公立学校教員 大 今 歩

あなたは、昭和56年3月ごろから、当時府立池田高等学校に在学中の女生徒と交際をはじめ、同年9月ごろ同女生徒と特別な関係をもち、同女生徒を妊娠させるに至った。

このような行為は、生徒の教育に携わる教育公務員としての社会的信用を著しく失墜するものであり、全体の奉仕者たるにふさわしくない非行である。

よって、地方公務員法第29条第1項第1号及び第3号の規定により3月間停職する。

この処分に不服のある場合は、処分のあったことを知った日の翌日から起算して60日以内に大阪府人事委員会に対して不服申立てをすることができる。

昭和57年10月15日



大阪府教育

昨春ごろから当時三年の女生徒と交際を始め、妊娠させたが、今年二月の卒業式の翌日に正式に結婚、その後、男児が生まれている（『毎日新聞』一九八二年十月十六日付）などと報じています。いずれも府教委の一方的な発表のみにもとづく内容ばかりでした。読みながら、頭の中に親や友だちの顔が浮かびました。へんな、これを読んでどう思うだろう。

もつとつらい気持ち味わうことになるとは、思いもありませんでした。

私たちは出会って、恋愛して、結婚して子どもを産んだ——たまたまそれが生徒と教師であったということ、なぜこのような処分をうけなくてはいけないのでしょうか。

翌日、新聞に私たちの処分のことがいつせいに報道されました。新聞に載ることは、歩さんが校長から聞かされていたので、朝起きるとすぐに各社の新聞を買ってきて読みました。

どの新聞も社会面に「在校生と親密関係」などの見出しを掲げ、「……A教諭（三六）は独身だった

取材攻勢

そして新聞に載った翌日から、こんどは電話がじゃんじゃんかかってくるようになりました。はじめ、何のことか分からなかった私は、電話をとり「ハイ、もしもし」

「〇〇ですけど、大今先生いらっしゃいますか」

「どちらの〇〇さんですか」

「講談社の〇〇です」

そういわれ、歩さんに受話器をわたしたのです。するといろいろぶしつけなことを質問され、歩さんは「答えることはありません」と怒ってすぐに切ってしまいました。

週刊誌が来た！ それからは、すべて電話は私がとることにして、何を聞かれても「処分については何も分かりません。歩さんはいません」と答えて切るようにしました。

けれども、取材は電話にとどまらず、記者が直接自宅に現れるようになったのです。

「ピンポーン」とチャイムが鳴って、「ハイ。どちら様ですか」。ドアの向こうで「大今先生に話を伺いたいですけど」。今度はヘアッ、週刊誌がきたとピンときて、「答えることはありません」といって、家の中で黙ってじっとしていました。すると玄関のドアをドンドンとたたいたり、チャ

イムを鳴らしつづけたり、大きな声で「大今先生！ 大今先生！」と叫ぶのです。ペランダの窓はカーテンを閉め切っていたのですが、外からフラッシュをたいて写真を撮っているのが、部屋の中にいても分かりました。

しつこい記者になると、そうやってしばらくして静かになり、帰ってよかった、と思っていると、突然電話がかかり、受話器をとると「大今先生、答えてくださいよ！」「答えることはありません」と切ってしばらくすると、またドアをドンドンドン。

夜十一時ぐらいまで大騒ぎしてから「ご近所にもご迷惑ですから、今日はこれで帰らせてもらいますけど、明日また伺いますから！」とすてゼリフをはいて帰って行く記者もいました。

赤ん坊のいる生活で、閉め切った家に一日中じっとしていることは、それだけでもしんどいのに、そのうえに昼寝をさせても電話のベルやドアをたたく音ですぐに起きてしまいます。私たちがイライラ、ビクビクしているのが赤ん坊にうつってよけいに神経質に泣いたり、とにかく苦しい毎日でした。

翌週になると、週刊誌にいっせいに報道されました。『週刊現代』『週刊サンケイ』『週刊文春』そして『フォーカス』など。見出しはどれも「ハレンチ課外授業」「学園セックス騒動」など興味本位に書きたてられており、内容は自分のことだとは、とても思えないものばかりでした。

「……肉体関係を結んだのは九月ごろ。B子さん（私のこと——引用者）はすぐ妊娠した。母親が感づき、娘を問い正した結果、相手が今泉教諭（歩さんのこと——引用者）と判明。母親は早速、独身だった今泉教諭に『責任をとれ』と直談判。今泉教諭はその対応に大いに弱り、同僚に相談するなどしたが、観念したのか、卒業式翌日の今年の二月二十六日、市役所に婚姻届を出し、立派（？）に責任を取った」（『週刊サンケイ』一九八二年十一月四日号）

この記事を目にしたときなど、記者のあまりにも、見事な創作、ぶりに、怒りを通り越して、脱力感さえ感じました。

表紙に大きく、このような見出しがでた週刊誌がどこの書店の店先にも並び、電車のつり広告にも、新聞の広告欄にも連日載っていました。私たちは身のおきどころがないような、自分が自分でないような不安と、つらい思いでいっぱいでした。

I

おにぎり